

兒童心理學の近況

園原太郎

兒童期を通じて精神發達の過程を記述し、その一般的な段階を明かにし、且その段階間の機能的な聯關を審かにすることは、兒童心理學の最初からの問題であつたが、一時盛であつた兒童心性の兒童的特性の理解への興味は近時下火になるにつれ、この發達聯關の問題は近時兒童心理學乃至發達心理學の主要な興味となつた觀がある。

兒童心性の兒童的特性の理解への興味が失はれてきたことも、近時の傾向の一つであるが、これは兒童心理學が兒童の心的機能の特性の解明を放棄した意味でもなければ、又解明しつくされた意味でもない。依然として兒童心理學に課せられた大きな問題であることに變りはない。併し兒童心理學に於けるこの問題の追求の仕方が地味になつて來たのである。

一九二〇年頃から三〇年前後にかけて、兒童心理學は、兒童の行動や心的活動に種々の點で成人のそれと著しく異つてゐる特徴のあることを明かにし、それに伴ひ成人の精神機能に比して兒童のそれが質的に異るとする兒童心理觀が發展した。ピアジェ、ヴェルナ、フォルケルト、コファを初めこの時期の兒童心理の研究は多少の差はあれ、かういふ見地か

ら兒童心理學の發展に寄與した。知覺が具體的で相貌的であること、概念も亦行動的で感情や意欲に強く色づけられること、推理や判斷にも兒童的特性ともいふべき並列主義混淆主義轉導主義自己中心性が強いこと、描畫にも特異な全體の表現や觀念的圖式主義が著しいこと等々、勿論このやうなことはそれまでの兒童研究者にも氣づかれ指摘せられてはゐたが、一層明確に一層斷定的に、兒童心性の特性が強調せられた。人によつて強弱の差はあるが、このため多少とも成人とは異なる特異な或は奇異な事柄が重視せられ、これらを特色づけ説明するために用ひられた行動の具體的全體性や前論理性などの概念は、成人の行動特性との非連續性を主張するかの觀があつた。兒童心理學的に兒童を理解するとは、斯るものとして把握されることであつた。然るに其後、これらの所謂兒童的特性の追試や檢證が、種々の條件の下で繰返されてみると、このやうな特性は必ずしも兒童にのみみられるものでなく、成人に於ても極めて常套的なものであることが明かになつた。兒童の特性として考へられた行動の特性は、寧ろ心的機能の一般的な基本的特性であり、成人に於ても特殊な場合を除いては、行動機構の基底をなしてゐると考へられる。

兒童の行動を具體的全體性で特色づけるよりも、却て成人を彼等が兒童よりも抽象的論理的に知覺し思考することもできるといふことで特徴づけた方が、心的機能一般の見方としては妥當であるとすら考へられる。勿論兩者の類同性は成人に於ては行動の基底に於ける特性であり、兒童に於ては具體的

行動そのものの特性である點で、兩者の行動そのものが同じであるといふわけではない。そこになほ兒童の行動特性を成人のそれと比較して特色づける意義が失はれないが、嘗て強調せられたやうな特性づけに比べれば二次的な重みしかもたぬ觀もある。兒童の心的特異性を成人と區別して特徴づけやうとする興味は、かくして寧ろ發達の見地へと移つて行つた。

近時に於ける兒童の心的機能の特性の解明は、以上のやうな成人と對比し區別される意味での特異性に於てではなく、却て兒童の具體的行動そのものが生起する状況の問題性、或は場の課題性について、如何なる條件が必要とされるかを、精密に條件分析することによつて遂げられやうとしてゐる。

これは、いはゞ成人に對して兒童の特質を區別するのでなく、一般的な行動法則に於て兒童行動の特異性が問はれるのである。この點に於てレヴィンの指導の下に行はれた多くの兒童研究は秀れた業績を残した。主として意欲的要因についての分析であつたが、レヴィン逝いて後は、衰微の徵が著しいと聞くのは淋しいことである。

發達過程乃至發達聯關の研究に於て注目される動向は、アメリカに於ける縱斷法による個體發達の綜合的な研究である。縱斷法とは同一個人について長期に亘り多數の觀察や測定を重ね、これによつて發達過程を研究する方法であるが、十年間の成長事實を得んとすれば十年の年月を要し、その間研究方法や

視點の變化など免れ難く、又統計的客觀性をうるに十分な人員をこの間確保することは殆んど不可能に近かつた。發達を成長的事實に於て實際に求めやうとするには、この方法に如くものはなく、又兒童心理學の初期の業績が今日尙資料價値を失はないのは、たとへ一人か二人の少數についてであつたにしても、それが縱斷的記録であつたことにもよると思はれる。併しこの方法には前記の如き困難が存するので、其後の兒童心理學では専ら縱斷法が常用せられた。これは、一定の年令範圍から見本として代表群を選択し、これらについての觀察や測定の結果を一定の年令域毎に纏め、その中心的乃至平均的傾向をプロットして發達の一般的傾向とみなす方法である。短時日の間に任意の年令段階に互つて、相當數の被験者について觀察や實驗を完了することができるので、從來の發達の研究は殆んどこの方法によつたものであり、兒童心理學の豊富な内容をなす發達段階の一般的規準も殆んどすべてこの種のものであつた。發達的事實の配列を通觀するだけならば、この方法で別段問題は起らないのであるが、發達の問題は單に事實の發達の配列だけで満足されない。寧ろ配列された事實間の機能的聯關や發生的聯關が重要な問題である。このため人によつては、寧ろ發達の段階は年令的順序によらずとも、不完全な状態から完全な状態までの進歩を示すやうに現象を配列する方がよいとしてゐる。こゝでは發達とは全く統制上の原理として用ひられ、發達段階はその分類に他ならない。併し兒童心理學で問題となる發達の概念は、單に統制上の分類概念や價值的な分類概念ではなく、個體

の成長といふ現象のうち、機能的乃至發生的な聯關を事實もつていふものであることが堪まれる。この機能的聯關を實證することは未だ至難のことに屬するが、もし縱斷法が用ひられるならば、例へば相關の吟味などによつて一步これに近づくこともできさうである。既に試みられた相關の研究の結果でも、現象形態的に同一範疇に屬せしめられた發達段階の間に必ずしも機能的な發生的關係がなく、後段階は前段階から直接移行するのではなく、その間に於ける全精神發育に、或は一見何等の關係もないやうな機能的發育により多く依存してゐる、といふやうな事實も若干指摘せられてゐる。實際上に精神發達は、行動と行動との間の關係であり、前段階と後段階とは形の上では類似してゐても、機能的には全の別の場合もあり、形の上では違つてゐても機能的に類似が見出されるものもある。このやうな關係にある發達を聯關的に考へるには縱斷的方法では手のつけやうがない。

又成長發達過程に於ける時間の重みも一樣でなく、急昇停滯の時期もあるし、個人の發達曲線には種々の動搖がある。縱斷法でも幾分成長の時間的變化の割合が知られるが、多くは個人的動搖のため相殺せられ明瞭な關係が認め難い。殊に諸他の發育現象との相互關係、發達のテンポに及ぼす諸種の影響など、發達過程の分析には縱斷法による研究が必要であることは、十年前程前からアメリカの主として臨床心理學の人々から強調せられてゐた。

一九三〇年頃からアメリカに於ては既に縱斷的研究の緒が始

まつた。フリーマン、オルソン、ベイレイの研究は夫、五年から十年に亘つて縱斷的なテスト測定が行はれ、マクファレインのパスナリテイの研究は二十年に及んでゐる。フリーマンの研究は最も早く（一九二二）に初められ、測定も只一組のテストを小學生に年一回繰返しただけなので、餘り見るべき結果を得なかつた。オルソンの研究は一九三〇に三歳半兒から初められ、知能、學習、身體發育、體力、社會性など數種の測定示標を併用して、五年から八年に亘つて繼續せられたのであるが、その結果には、これらの示標がかなりよく平行して發達すること、身邊環境に起つた激しい變事や、感情的社會的な不適應は、發達のペースを遲滞させること、これらの發達示標を全體としてみると發達は直線的に進行すること、そしてその成熟は個人が社會的にうけいられるか否か、社會活動の中心に立ちうるか否かと重要な關係があることなどが示された。ベイレイの結果では生後二年間の精神發育のレベルは爾後の知能水準と殆んど關係がないこと、個人の知能的水準には漸次低下するもの漸次上昇するものなどがあるが、略四歳前後にその水準がきまること、親の社會的經濟的發育的水準が七八ヶ月以後のテスト成績と漸次に高く相關してくること、知能的發達に及ぼす環境因子の影響は兒童個々によつて異り、一般的にはいへぬことなどが得られた。

これらの研究は縱斷的方法による研究としては率先行はれたものであるが、これでも縱斷的方法に於ては出来るだけ多種の測定が同時に行はれて、相互の間の相關的研究が伴ふこと

が重要な要件であることが分る。多數の研究者による綜合的な研究が周到な用意の下に繼續せられたならば一層効果的である。アメリカの臨床心理學者の間に近時盛に斯様な研究が進められてゐるとのこと、その成果について大いに期待がよせられる。

このやうな大仕掛な縦斷的研究が初められたことはまことに、喜ばしいことであるが、併しそれと共に發達の問題に於ては尙横斷法による組織的な研究も、今後益々發展されなければならぬ。組織的な縦斷的方法はまだ緒についた所であり、又この方法の最も缺點とされる所の、長い期間に互る間に自然と生ずる觀察方法の變移を防ぐために、専ら標準化されたテストが用ひられる結果、個體發達の時間的分析や相關的吟味は期待せられるけれども、心的機能の發達の成立過程を内容的に明かにすることは、尙遠い將來のことである。

寧ろ今の傾向では縱斷的方法に私共が期待する機能の發達の聯關の線からされて、個人的發達曲線の分析に終始する恐れも十分ある。眞に成長的な發達聯關が確められるか否かは第二の問題として、同一の課題狀況に於ける種々な年齢の兒童の行動や作業を、機能分析的に發達聯關で考察することは、依然として兒童心理學の中心の問題であらう。この種の研究は兒童心理學の凡ゆる分野に互つて常に發表せられてゐるが、中でもピアジェの近著「兒童の時間概念の發達」(兒童の空間表象)は多數の協力者と共に三歳から十二歳までの兒童多數に試みた研究成果で、大いに注目に値する。丁度同じ頃

規模はこれに比べて甚だ小さいが、イエールのエイムズが、幼兒の時間と空間の理解の發達について研究を發表してゐる。

發達の問題とも關聯するが、これと並んで環境殊に社會的環境の分析や效果に關する研究も近頃めだつてゐる。性格形成の場として家庭の重要さは、我國でも少年不良防止などで喧しくいはれてゐるけれども、その家庭的環境の分析殊に親子の關係、子の親に對する態度、親の子に對する態度の研究がアメリカの發達心理研究専門誌によく發表されてゐる。このやうな關係や態度を分類別し、その消傳的關係や子供の性格犯罪不適態等に關する相關の吟味は我國では臨床心理關係の方でもまだ研究されてゐないやうであるが、發達の問題からいつても又實際面の側から言つても、このやうな研究は是非行はれねばならぬと思はれる。

兒童の發達は具體的には環境と相即的な事象であり、單に兒童だけ或は環境だけを取扱ふのでは、行動や發達の理解には足りないものがある。環境の中でも特に社會的環境が精神發達にとつては特別な意味をもつてゐる。社會的環境に於ける兒童の行動、或は兒童の社會的行動が、この意味から言つて近時の兒童心理學では非常な關心をもたれてゐる。兒童の社會的行動や社會性の發達は兒童心理學では古くから取扱はれて來た問題であつたが、これを兒童の主體的な事象とせず、社會的狀況に於ける行動的事象として、行動力學的な問題として新しい發展を促したのは、やはりレヴィンであつた。リビットの所謂社會的

氣候、競争、管罰、友好非友好的態度、要求水準、フラストレーション、アグレッション、などの問題が、この社會的狀況に於ける事象として、取上げられてきた。同時にこの問題は、社會的狀況に於ける適應の失敗や感情的葛藤に關聯し、精神分析學的興味に連り、性格形成の問題に結びつく。これらについて豊富な研究が積重ねられてきたが、今後益々、この方面は開拓され廻下されて行くであらう。

我國の兒童心理學界は、戰後、教育心理學の移植に多忙で、まだ本格的な兒童心理乃至發達心理學的研究にはいつてゐないのではないかと思はれる。勿論、兒童心理學に對する關心は、一般心理學的興味からくることもあり、教育乃至臨床心理學的の問題からくることもあるし、又發達心理學的立場から寄せられることもある。何れを本格的な兒童心理學の問題とするかは、人によつて意見が異なるかもしれない。併し何れにしても、我國の兒童心理學界は、研究者の数が比較的多いにも拘らず、又通俗的概説的著述が多いにも拘らず、實證的な研究の面では、戰後數年を経た今日でも、未だ何か沈滞してゐる感は免れ難い。兒童心理學の個々の仕事は比較的根氣のある而も些細な事柄が多い。これを組織的に結集することが大切であらう。この意味から、従來の我國に於ける關係文獻を網羅した武政太郎博士の『最新發達心理學』(昭和二十三年)や、兒童研究會編輯の『兒童心理學叢書』(昭和二十四年—二十五年)は、その勞を多とした。アメリカに於けるカーマイケル編の『兒童心理學總覽』(一九四六)と共に、今後の研究者に出發點を與へ、文獻索引の便を與へるであらう。

執 筆 者 紹 介

| | | | |
|-------------------------|----------------------|-----------------|----------------|
| 重 澤 俊 郎 | 樋 元 和 一 | 岸 畑 豊 | 岡 原 六 郎 |
| 京都大學文學部(支那哲學史) 文學博士 教 授 | 大阪市立大(哲學倫理學)助教 學家政學部 | 大阪大學教養部(倫理) 講 師 | 京都大學文學部(心理學)助教 |